

サイエンス・フィクション（SF）における時空間の 捉え方—初期ドイツ語圏「時間SF」を例に

徳 永 菜 摘 野

デビッド・ヴィッテンベルクが『タイム・トラヴェル』（2013）で指摘したように、SFが「物語論の実験室」であるならば、長らくサブ・カルチャーとして文学研究の脇に追いやられていたこのジャンルも、物語論的な探究の対象となりうる。パトリック・C・ホーガンの『登場人物たちとそれらのプロット』（2010）では、物語のプロトタイプの三つの構成要素として出来事の連続、登場人物、場面が挙げられている。それを踏まえるとSFの物語論も、出来事の連続、それが生じる時空間、そして登場人物の人物描写の三つで構成されうる。SFにおいてこの三つの構成要素はある程度パターン化され、SF内部にサブジャンルを生じさせることがある。そのサブジャンルの一つに「時間SF」がある。浅見克彦は『時間SFの文法』（2015）において「時間SF」を「特殊な時間世界を設定しながら、時間旅行のような独特の経験を描き出す物語」と定義づけた。

本発表ではSFの物語論の三つの構成要素の内、時空間に焦点を絞り、「時間SF」における時空間の捉え方をパターンに分類し、その分類を元に、対象作品の時間イメージとその意味合いを考察した。対象としたのは、オスカー・ホフマン（Oskar Hoffmann, 1866-1928）の『第四の次元—形而上学的空想小説（*Die vierte Dimension: Metaphysischer Phantasieroman*）』（1909）である。彼はドイツの通俗科学作家で、天文学と経済政策に関する論文、通俗自然科学的教本や入門書、戯曲の他に、今日ではSFと呼ばれうる数多くの冒険的、技術的、空想的な小説を執筆した。本発表では同小説における時空間の捉え方を、浅見による「時間SF」の五パターンの内、①タイム・トラヴェルの物語、②タイム・スリップの物語、③並行世界へ跳躍する物語、⑤時間の果てをのぞむ物語に分類した。分類からホフマンの同小説の非線形的時間イメージが、物語一般の正統な価値、つまり過去から未来へつながる線形的時間イメージや、時間線上の因果関係に疑問を投げかけることが明らかとなった。さらに、この作品が内包する自由意志による未来の創造と決定論的な未来世界との矛盾が、近代以降の自由、自律、平等など人文主義の理想と現実との乖離をついた西洋文明批判である点を展望した。